
幕末異聞 疾風録 4 ～ 必殺？！ お守り奪還作戦！

花衣 悠希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幕末異聞 疾風録4〜必殺?! お守り奪還作戦!

【Nコード】

N6390F

【作者名】

花衣 悠希

【あらすじ】

時は幕末。長州藩士、品川弥二郎が京の町で落としてしまったお守りは松陰先生の手作り品で大事なものと。ところが、なんとそれは新選組に浪士探索の証拠品として押収されてしまっていた。何とか彼らからお守りを奪還しようと、桂小五郎、高杉晋作たちは策謀をめぐらす。・長州藩志士VS新選組の行方はいかに?! ドタバタ幕末ファンタジー第4弾です!

第1話：行方

「なんだってええええ？！」

時は幕末、京都河原町の長州藩邸から素つ頓狂な声が響き渡った。藩邸内の座敷では品川弥二郎がしょぼん、と小さくなって座っていた。目には涙を溜めている。

「まあ、そんなこと言っても仕方ないでしょう？　・・・晋作、大体あなたが悪いんですよ？　弥二郎をそのままにして帰っちゃうから。」

卓の上で書き物をしながら桂小五郎がたしなめるように言った。

「だあってよお。まさかそんな事になるとは思ってたからさあ。・・・悪い弥二、本当ごめん。」

冒頭の声の主、高杉晋作は立ち上がって頭を下げる。弥二郎はあわてて首を振った。

「謝らないで下さい、高杉さんっ！　ぼ、僕が悪いんですう。

どんくさく通りを歩いてたりなんかしたから・・・。」

その瞬間はたたと畳の上に涙が落ちる。

「弥二、そんなに自分を責めないでよ。弥二のせいじゃないつて。よく逃げ切れたと思うよ。」

弥二郎の隣りでは吉田栄太郎がしきりに慰めている。

「・・・でも、お守りを無くしたのはまずかったかも。桂さん、どうしましょう？」

栄太郎は小五郎の方に向かって言った。

小五郎の書く手がふつ、と止まった。

事の次第はこうである。

* * *

先日、晋作と弥二郎の二人が料亭に連れ立って遊びに行ったのだが、（正確には晋作が無理やり連れて行ったのだが）そこでしばらく遊んでいると、たまたま晋作の知り合いの芸妓にばったり会い、話が盛り上がってしまったと、晋作はそのまま弥二郎を置いて彼女と別の場所に飲みに行ってしまったのだった。

後に残された弥二郎は仕方なく夜道をとぼとぼと歩いて帰っていた。

ところが。

その途中、浪士組の探索網に引っかかって襲われてしまったのである。

命からがら逃げる弥二郎。

逃げる途中、七条の三十三間堂が目に入り、その本堂の観音像の中に身を潜めて何とか振り切れたのだが、気がつくとき今まで肌身離さず身につけていたお守りが無い！

* * *

「普通のお守りなら何とでもなっただんですけどねえ……。よにもよって松陰先生の手作りお守りとは……。」「
小五郎はため息をついた。

「ぼ、僕、松陰先生の下さったものは全部宝物なんですっ！店で売ってるものだって、手作りだって変わりませんっつ。」

弥二郎は必死になって言った。

「分かってますって、弥二郎。問題はそうじゃなくてですねえ。松陰先生、超びつくり人間でしたから、お守りの中に絶対何か仕込んでいるはずなんですよ。考えたくはないですけど、もし万が一、そ

れが幕府のお偉いさん方の暗殺計画だったりしたら・・・本当に拾った人間によつてはまずい事態になりかねないんです。」

「そ、そんな。あれは、ふ、普通のお守りですっつ。先生も何も言いませんでしたし、変なところなんて何もありませんっつ。」

弥二郎は躍起になっている。

だが、小五郎は容赦が無い。

「でも、中に何が入ってたのか見てないんでしょ？ 何にも無いって確証とれます？」

「・・・うつう・・・。その通りです・・・。」

弥二郎は反論できずに、しよげ返ってしまった。

「なあ弥二、そのお守りってどんなのよ、一体？」

晋作が腕組みをしながら言った。

「え、えーつとですね。色はピンク色なんですけど、大きさがこれくらいでえ。」

言いながら指で形をつくる。

「・・・おい、それちよつと形おかしくないか？」

晋作はその形を見て怪訝そうな顔をした。

「いえ、これはハート形なんです！」

弥二郎はきっぱり断言した。

「ハ、ハート形あゝ?!」

晋作と栄太郎は唖然としてしまった。

どこが普通のお守りだよ 弥二郎・・・。

だが、小五郎は唖然とすることも無く再びふうつとため息をついた。

「やっぱりね・・・。実はハート形のお守りなら、心当たりがあります。」

「まじ?!」

「ええっ、うつそー。」

「本当ですかあゝ。」

三人が思わず小五郎の方に身を乗り出す。

「ただ、ちよつと厄介なところにあるんですよー。」

小五郎はどことなく遠い目をした。

「どこなんですか？ それ。」

栄太郎が重ねて聞いた。

「壬生の浪士組のところですよ。最近彼らがやけにお守りの主を捜しているとの情報は入ったもんでねえ。やれやれ全く、そうじゃなかつたらいいのにと心底願ってたんですけど・・・。」

「あそこかー。」

「運悪すぎですねー。」

晋作も栄太郎も苦い顔をした。

壬生浪士組。最近江戸からやって来た会津藩預かりの治安部隊である。長州藩の志士たちから見れば面倒な連中であることは間違いない。

「ぼ、僕っ！ その浪士組のところに行つて返してもらいに行きますっっ！」

弥二郎が思いつめたように、急に立ち上がった。今すぐにでも飛んでいきそうな様子である。

三人ともぎよつとした。

「だ、駄目だよ弥二。」

慌てて栄太郎が弥二郎を座らせる。

「そうだぜー。あいつら返してくださいって言って、あつさり返してくれるような生易しい奴らじゃねえんだからよー。ここは冷静に考えないと・・・なあ、小五郎。」

晋作は小五郎に話を振った。

「うん？」

「聞いてたのかよ？ さっきの話。」

不審そうな顔をした晋作。

「すいません、ちよっと考え事を。そうですね……。まあ、手が無いわけではありませんが。」

「？ どうすんだよ？」

第2話：策謀

小五郎はちよつと言いくそうに言った。

「ほら、先日、村田さんが壬生浪士組の沖田さんを藩邸に連れてきたことがあつたでしょ。誘拐まがいなことをして。」

「？」

いまいち思い出せずに首を捻る晋作に代わつて栄太郎が答えた。

「あー、ありましたねえ。そんなことも。でもまあ、村田さんも病気の沖田さんを治すのに藩邸を使つていう発想がズレてますよね。」

小五郎は苦笑いした。

「まあ、あの人に常識を求めるつてのが、そもそもどうかと思ひますけど。」

「確かに……。」

その時、晋作が急に大声を上げた。

「あーっ、壬生の副長がいきなり刀を振り回したヤツね！ あいつ、おつかねーよな。人を親の敵の様に見てくんだもん。あれは参つたぜ。」

小五郎はキツと晋作を睨みつけた。

「あれは、あなたにも責任があるでしょっつ。勝手に壬生にちゃちゃ入れに行つたりなんかするから。」

睨みつけられて思わず首を竦める晋作に栄太郎が苦笑しながら言った。

「それを言うなら桂さんもですよ。幾松さんの押しかけ大変でしたもん。」

聞いて晋作も我が意を得たり、とばかりに大きく頷く。

「そうそう！ あれは大変だったよな。抑えるのに。あれが一番一番。大体、幾松姐さんを放つてた小五郎が悪いんだぞ。」

「あなたたちねえ……他人事だと思つて。聞く気が無いなら

話しませんよ。」

心底恨めしそうに言った小五郎。よっぽど後が大変だったらいい。それを察して慌てて晋作が手を横に振り、栄太郎もフォローに入る。「うそうそ。まあ、今は仲良くやってんだろ？　結果オーライで良かったじゃねえか。」

「そうですね。さすがは桂さんです。・・・それで？」
小五郎はやれやれといった風に一つため息をつくと続けた。

「・・・それですね。結果として壬生の方々をお騒がせしてしまったそのお詫びに、と思ひまして、局長の近藤さんと副長の土方さんを三本木に招待しているんですよ・・・。」

「まじ？」

「桂さん、まめですね。」

晋作も栄太郎も感嘆の声を上げる。

「あの、まめとかそういう問題では・・・。とにかく、そんな訳で彼らに不審を抱かせずに接触するのは可能です。」

「なるほど。」

晋作の目が光ったのを見て、小五郎は嫌な予感がした。

「晋作？」

「よし！　三本木だったら、誰かが芸妓に化けて、奴らを酔わせて、その隙にお守りを奪い取るっての出来るんじゃないやね？　小五郎、この線でいこうぜ！」

「晋作・・・ただでさえ迷惑かけてるんですよ？　この上また相手方をハメる気ですか？　ここは、さりげなく話を振って穏便に・・・。」

げんなりした小五郎に晋作が強く言った。

「おいおい、そんな悠長なこと言ってる場合かよ？　一にも二にも実力行使あるのみ！　第一こんな願ってもないチャンス、使わないでどーすんだよ。」

「まあ、そうですね・・・。やれやれ、純粋なお詫びにしたかったのに・・・。」

言いながらあんまり気乗りのしない様子の小五郎。

「でも高杉さん。相手がそのお守り持つてくるとは限らないんじゃないですか？」

栄太郎が怪訝そうに言った。

「いや、絶対持つてくる！ ああいう手合いは大事なものは自分の手元に置いてないと気がすまないはずだからな。」

晋作は自信満々に胸を張った。

「・・・私もそう思います。まあ、たとえ持つていなかったとしてもやってみる価値はあるかもしれませんね。何と言っても急を要しますし。」

小五郎はそう言うと言作の方に向き直った。

「仕方ありません。私も腹くくりましょう。晋作の策に乗ります。」

「小五郎！ そうこなくっちゃ！」

満面の笑みの晋作に小五郎はにつこり笑ってさらい、と言った。

「では、芸妓役は晋作、あなたにお願いしますね。」

「・・・は？」

晋作はそれを聞いて豆鉄砲を食らったような顔をした。

「なんで俺が？ ヤだぜそんなの。」

「だって他にいないじゃないですか。」

小五郎は心外という様子である。

「小五郎、お前やれよ。」

「何言つてんですか。私はできませんよ。だって私が招待主なんですから、そもそもないとおかしいでしょ。大体こんな大女、まずいでしょうが。」

「・・・そりゃそうだけど。」

不本意そうな晋作に小五郎はたたみ掛けるように、ちらつと視線を栄太郎と弥二郎に向けた。

「それとも、栄太郎や弥二郎にこんな危ない役をさせる気ですか？」

見ると栄太郎と弥二郎は思わぬ展開に目をキラキラさせている。

「頑張ってくださいっ、高杉さんっ！」

「大丈夫です！ 高杉さんの芸妓姿、絶対似合うと思いますっつ。」

「あほかっ！ 似合ってたまるかっ！！ 分かった、やるよ。やりゃあいいんだろっつ。」

「・・・ったく。小五郎、ちゃんと幾松姐さんに話っけといてくれよ。」

晋作はふんつとそっぽを向いた。

小五郎はその様子に苦笑した。

「分かってますよ。とびきり可愛くなるように頼んどきます。」

「いらんわっつ、そんなのっつ！！」

再び晋作の大声が藩邸中に響き渡った。

第3話：前哨戦

数日後。

三本木の料亭では和やかな雰囲気の中、宴会が始まっていた。

「先日は私どもの藩のものが、本当に申し訳ありませんでした。」

小五郎が近藤勇に深々と頭を下げる。

「いやいやとんでもない。看病までして下さって、本当はこちらの方が礼をすべきでしたのに・・・。」

「沖田さんはその後ご健勝でいらっしゃいますか？」

「ああ、ぴんぴんしとるよ。さすが、そちらのお医者手腕が違いますなあ。」

そう言うのと近藤はおおらかにガハハと笑った。

ギシッ

天井が急に軋みを立てた。

小五郎はこういう物音には敏い。ふっと音のした方を見上げた。

「何か天井が揺れた気がしましたが・・・。」

「うん？ さあ、気づかなかったが・・・。トシ、お前は気づいたか？」

近藤は隣りでずっと仏頂面の土方歳三に声を掛けた。

「さあな。ネズミじゃねえのか。」

歳三はそっけない。

実は歳三は天井裏に浪士組の監察方、山崎蒸を近藤に内緒で潜ませていた。

さっきの物音はそれである。『医者』という言葉に反応したらしい。「そうですね。」

小五郎は歳三の抜け目なさを察して、思わず苦笑した。

これは、たぬきときつねの化かしあいになりそうですね。．．．
やれやれ。

その時、襖がするすると開いた。

芸妓が三人深々とお辞儀をしている。鮮やかな朱色の派手な衣装が目眩しい。

「お酒をお持ちいたしました。以後お見知りおきを。」

三人のうちの一人、幾松はそう言う酒を運ぶように他の二人に目配せした。

二人はそれを合図に、すつと顔を上げる。

それを見て、不覚にも小五郎は固まってしまった。

か、かわいい．．．。

彼のあばた面はおしろいのせいかわくすべすべで、口元は小さくおさまり、目は大きくくりつとしている。また長い睫毛が頼りなく動くのがなんだか儚げで、思わず守ってやりたい衝動にかられてしまう。一体どこをどうしたら不遜不敵な彼からこんな姿が出来上がるのか．．．？

だが、思わず見惚れてしまったのは小五郎だけではなかった。

近藤も、であった。

彼はぽかーんとしてしばらく大口を開けて見つめていたが、はつと正気に戻ると視線の先の左側の芸妓を手招きして呼んだ。彼女はそれに気づくと、足取りもぎこちなく近藤の方へ向かって進んでいき、遠慮がちに近藤の隣りに座った。その間にすかさず右側の芸妓は歳三の隣りに座ると、手際よく酌をしだす。

幾松も近藤の前に座るとにつこり笑って言った。

「この子はまだ入ったばかりで何かとおかしなこともあるかし

れませんけど、宜しくしてやって下さいましね。」

「あ、ああ・・・大丈夫だよ。悪いようにはしないから。」

近藤はすっかり上の空であつた。彼女のまばたきで揺れる睫毛ばかり見ている。

幾松は再びお辞儀をして近藤の前を辞すると、今度は小五郎の隣りに座つた。

「小五郎さま。」

小五郎はまだ固まつたままだつた。

「小五郎さまってば！」

幾松が小五郎をこづく。

「え、あ、いや、すいません。ちょっとぼーっとしてしまいました。」

小五郎は素直に謝つた。

「かわいいでしょ。あの子。」

幾松はくすりと笑つた。

「あ、ああ・・・すごいですね。まさかあそこまで化けるとは・・・」

「」

「予想外？」

「ええ。」

「惚れた？」

「ええ。」

小五郎はそこで息を継ぐと、幾松ににっこり笑いかけた。

「あそこまで化かしてくれた幾松さんにね。」

「まあ、お上手。」

幾松は、ほほと笑うと小五郎の杯にお酒を注いだ。

宴は和やかに時は過ぎてゆく。

「ねえ。」

しばらくして、幾松が小五郎に酌をしながらそつと囁いた。

「高杉さま、ずっとあんな調子だけど大丈夫かしら？」

視線の先にやけに上機嫌な近藤と未だどこか動きがぎこちない晋作の姿がある。

小五郎はにつこり笑って言った。

「大丈夫ですよ。彼の胆力には誰も敵いませんから。何とかなるでしょう。ただ。」

小五郎はふつと遠い目をした。

「ただ？」

「土方さんも下戸ですが、晋作も大概お酒弱いんですよ。」

いきなりの爆弾発言をさらりと言われて、幾松の手が思わず止まる。晋作の方を見ると、顔はおしろいで分からないが、確かに頭がかなりふらふらしている。

「えっ?! じゃあ・・・。」

「そう。晋作の言う、酔わせてどうこうする作戦なんて所詮無理なんですよ。まあ、最後いざとなったら私がなんとかしますけどね。・・・ふっふっふっ。」

不意に笑い出した小五郎に幾松はぎよつとした。

「こ、小五郎さま?!」

小五郎は杯をあおった。目がどこか据わっている。

「たまにはいいでしょ、こんなのも。大体少しは困ってくれないと、こつちの割りに合いませんからね。」

「・・・あなたも酔ってらっしゃるのね・・・。」

やれやれ、といった風の幾松であった。

第4話：演技

さてはて、視線の先の近藤と晋作であるが。
「ずいぶんおとなしいんだのう。」

ぎくっつ。あやしまれた？！

とにかくバレない様に俯き加減に黙々ときこちなくお酒を注いでいた晋作に近藤が声を掛けた。

「えっ？！ いや、あの・・・。」

思わずしどろもどろ。声も裏返っている。
だが近藤は全く意に介さない。

「意外にハスキーボイスなんだね。恥ずかしがることないよ。それ
もとっても可愛いから。」

なんだってーっ。どんな趣味してんだよ、こいつー。

思わず後ずさりしようとした晋作であつたが、彼がそうするより
一瞬早く近藤の手が伸びてきた。それになすすべも無く、ぐっと強
く腰が引き寄せられるのを感じた瞬間、近藤の顔がすぐ間近に迫っ
ていた。

彼は笑顔で顔がとろけそうになっている。

「近くで見ると、ますますかわいいよ。」

熱い息が容赦なく晋作の顔にかかる。

ぞわぞわぞわっ

晋作は総毛立った。
冷や汗が流れる。

ひいひいひいひいひいつつ……。じ、冗談じゃねーぞーつつ！
このままでは俺が奴らにお守り出させるどころか、逆に本当にい
いようにされちまう。な、何とかしないと。

だが、頼みの綱の小五郎は幾松と楽しそうに談笑していて、たまに頑張れサインを送ってくるだけである。

くつそーつ。あいつ楽しんでやがるな。あとで覚えとけよー、小五郎の奴う。

ふと小五郎から視線を逸らすと、そこに黙々とお酒を飲んでいる歳三の姿が目に入った。

その瞬間、晋作の頭が急に冷えた。

こいつがお守りを持っている
確証など何もない。これは晋作特有の勘だと言っている。
今までふらふらしていた晋作の頭が一気に回転した。

こうなりやヤケだつ。何とでもやってやる。バレたらバレたで何とかなるだろ。その時は頼んだぜ小五郎！

「ねえ、近藤さま。」

晋作は近藤に逆に擦り寄って精一杯の猫なで声で言った。

「ちょっと小耳に挟んだんですけどお、最近お守りの持ち主を捜してはるって本当なの？」

「うんうん、そうなんだよ。ちょっと前に取り逃がした奴の持ち物だからねえ。」

「へーっ。ねえねえ、それどんなお守りなの？俺・・・あ、いや、私すっごく見てみたいなあ。」

晋作は近藤が答えるより先に彼の両手を素早く取ると両手でぎゅつと握り締めた。目はうるうるしている。

「私も近藤さまのお役に立ちたいの。ほら、ここにはたくさんお客さんも来はるし。知ってるかもしれないから、ね。」

近藤は晋作の一生懸命な口調にすっかりめろめろである。

「そこまで言ってくれるなんて、ほんといい娘だのう。なあ、トシ。持つてるだろお守り。見せてやってくれよ。」

歳三はちらつと近藤の方を見た。彼もほんのり顔が赤い。

晋作は思わず固くなって顔を俯かせた。

だが。

「だめだ。」

歳三はそっけない。

「なんでだよトシ。せつかくこんなに言ってくれてるのに。」

「これは大事な戦利品なんだ。おいそれと見せるわけにはいかない。第一、自分からそんなこと言い出す奴は危険だ。」

歳三の態度は頑なである。

「トシい。そんなこと言つて、まだ持ち主見つかってないだろ。早く判明させないと、そのまま逃げられちまうぞ。」

晋作も必死である。近藤の隣りでうんうん頷いている。

「そつですよー。」

意外な方向から声がした。小五郎である。

「そういうものは旬がありますからねえ。相手も最初は探しているでしょうけど、すぐに忘れてしまつてしまうでしょう。そうなれば、たとえばその真の持ち主であつたとしても、知らない、何それ、ってことになりますよ。」

そう言つと我関せずといった風に再び杯を傾けた。

「・・・分かつた。」

歳三は不本意っぽそうだったが、ごそごそと懷を探り出した。

やっぱり持ってやがったか。

晋作と小五郎の目が光る。

それに近藤は気づいてはいない。

第5話：激突

「これだ。」

歳三が取り出したのは、ピンク色の小袋。しかもハート形。間
違いない、これだ。

晋作と小五郎はお互い目配せした。

「これに見覚えがあるか！」

歳三は鋭い口調で言った。

晋作はその様子に啞然とした。

おいおいおい、女性に対してそんな物の聞き方するか、普通。
よーし、こうなったら・・・。

「近藤さまあ。」

晋作は近藤の後ろにこそそそつと隠れるように袖を引っ張った。

「なんだかあの人こわい。」

その手はどことなく震えている。

近藤はその手を優しく取った。

「大丈夫だよ。彼は恥ずかしがり屋さんなだけだから。君と同じで。」

はあっ？ こいつのどこが恥ずかしがりだよっっ！！

大体、こんな奴と一緒にすんなっっ！！

歳三も同じようなコトを思っただけ。

晋作と歳三の怒りの視線が同時に近藤に向けられる。

だが、近藤はがはつと笑っただけで再び杯を傾けた。

小五郎はしきりに杯を重ねている。さすがの彼も笑いを堪えるのに
必死らしい。肩が小刻みに震えている。

彼は目を真つ赤にしながら言った。

「土方さん、もう少し近くで見せてあげたらどうです?」

「おお、そつだそつだ。そんな遠くからじゃ分かるハズがないものな。トシ。こっち持ってきてくれ。」

近藤はポンツと一つ手を叩くと歳三に軽く手招きした。

歳三は軽く扱われてちよつとムツとしたらしい。が、そのまま立ち上がった。

「・・・たく。」

ぶつぶつ言いながら歳三が近づいてくる。

来た!!

さすがの晋作も顔に緊張が走る。

歳三は晋作の前に座った。

「ほら、これだ。」

差し出された手のひらにピンク色のお守りがちよこんと乗っている。

それを思わず食い入るように見つめた晋作。

そして、恐る恐る手を出そうとしたその瞬間。

「・・・待て!

お前、どつかで見たことある様な・・・?!」

不意に歳三が晋作の顔を覗き込もうとした。

「え?!」

まずいっつ、バレた?!

次の瞬間、晋作はものすごい勢いで歳三の手からお守りをひったく
ると思いつきり体当たりしていた。

ドカツ!!

突然の衝撃を歳三はまともに受けて晋作の体と共に畳の上に転がるが、あまりの予想外の出来事に近藤も小五郎も何が起こったのか全く思考が働かない。

だがその時、座敷の襖がすぱっと小気味良く開け放たれた。

甲高い声が座敷中に響き渡る。

「さあさあ、こちらの皆さまをおもてなしして！」

その声を合図にどこか大勢芸妓たちが座敷の中に入ってきた。

彼女たちはあまりのことに面食らっている近藤と歳三の周りに集まると、歌ったり踊ったりのだんちゃん騒ぎを始めた。

ぱつ、と場が華やかになる。

幾松だ。

幾松は遠いところから小五郎にウィンクして見せた。

彼女は万一の時のために芸妓衆を残らずかき集めていてくれたらしい。

小五郎はほっと胸をなでおろした。

晋作の姿は既にある。彼ならなんとか逃げ切ってくれるだろう。

やれやれ、最後まで冷や汗ものですねえ。

あとは頼みましたよ、晋作。

小五郎は再び杯を取った。

第6話：追跡

一方、おさまりのつかないのは歳三である。

何しろ、いきなり体当たりされたあげく、お守りを取られてしまい、気づけば芸妓たちに囲まれて身動き一つ取れないのだから。

しかし、あのひったくった時といい、とても女の力とは思えねえ。奴は本当に・・・女か？ まさか？！

彼が顔を覗き込んだときの相手の心底ぎよつとした表情がまだ脳裏に焼きついている。

まあいい、ひつつかまえばおのずと分かることだ。

歳三は乱暴に杯をあおると、そつと後ろの衝立に目配せした。

その裏には予想外の事態に慌てて移動してきた山崎蒸が潜んでいた。

「どうしましょう。」

「階下に永倉がいる。奴に追わせろ。お前は先回りして長州藩邸を見張れ。いいな。」

「了解しました。では早速。」

衝立が一瞬揺れたかと思うと再び静かになった。

まだそう遠くには行っていないハズだ。捕まえるのも造作ないだろう。

歳三は隣りで上機嫌になっている近藤にちつと舌打ちすると、再び飲み始めた。

* * *

さて、その頃晋作は通りを必死で駆けていた。

ひいひいひい 晋作の息は荒い。

何でっ たって女ってやつは、こんな動きにくいもん着てんだよー
っつ。

着物の裾はさかんに足に纏わりつき、足が前に出ない。

その上、頭に乗っけているカツラが重くて仕方がない。豪勢な衣装
もこうなったら無用の長物である。

不意に体が揺れた。

「うわっっっ！」

ずざざざざざあ……………。

着物の裾を思いっきり踏んづけたらしい。晋作はしたたかに顔を地
面に打ち付けて倒れこんでしまった。

や、やばい……………ここで捕まったら一貫の終わりだ。とにかく体
を起こさないと。

だが、着慣れない着物の重みで、いつものように機敏に立ち上がれ
ない。冷や汗が出てくる。

その時おもむろに晋作の上から提灯の光が照らされた。

もう追いつかれた ？！

思わず胸に入れていたお守りを握り締める。そして。

* * *

しばらく後、

「おい。」

壬生浪士組、永倉新八が町を歩く侍に声を掛けていた。

「はい？ 僕のこと呼びました？」

提灯を持った侍は新八の方に振り向いた。暗くてよく分からないが隣に派手目の女を連れているようだ。

「俺は壬生浪士組の永倉新八という者だ。さっきこの辺を芸者の女が通らなかつたか？」

「いえ、そんな人は通らなかつたですが……。その人が何か？」侍は考え込む仕草をした。

「ちよつと訳ありでな。搜している。」

新八は辺りを見回した。

「どうやらこの道ではなかつたらしい……。京の町はややこしくてかなわんな。」

「どうもご苦労様です。」

新八は頭をかいた。

「悪かつたな、引き止めたりして。」

「いえいえ、では。」

侍は軽く会釈すると、連れの女と一緒にその場を去ろうとした。それを見送ろうとして、新八は目を見張った。

あの連れの女の着物の色 鮮やかな朱色。まさか 。

「おいっ！！」

新八は思わず大声を出すと、連れの女の肩に手をかけた。
その瞬間 。

女の体は糸が切れた様にふらふらと地面に崩れ落ちた。

新八はぎよつとして思わず手を引っ込めた。慌てて隣りの侍が女を抱きかかえる。

そして、キツと新八を睨み据えた。

「いきなり何するんだっつ！！ この人は具合が悪くて、これからお医者に診てもらいに行く途中なんだっつ！」

怒りの炎が目にも宿る。

「この人に何かあったら、あんたどう責任を取ってくれるんだ！」

あまりの剣幕に新八は思わずたじたじになった。

「いや・・・すまない。悪かった。軽率なことをした。・・・気を付けて行ってくれ。」

侍は少し表情を緩めた。

「ありがとう。」

彼らは、今度は新八が走り去るのを見届けて再び歩き出した。

第7話：正体

・・・しばらく侍と女の二人は黙って歩いていたが、もう堪えきれない様子で侍が隣りの女にひそひそと声を掛けた。

「おい、もうそろそろ演技はいいから僕に寄りかかるのやめてくれ。重くてかなわん。んでもって、もう少し速く歩けんのか？　いつまで経っても家につかねーだろが。」

隣りの女も負けじとやり返す。

「仕方ねーだろー。着慣れてねーんだからよー。好きでやってんじやねえって。俺だって、お前なんかに寄りかかってんの屈辱なんだからな。」

言い合いながら、彼らの視界の先に河原町の長州藩邸が見えてきた。

だが、そこはあえて素通りしていく。

長州藩邸に光る視線を感じつつ、二人はそのまま近くの家に入ってしまった。

ここは小五郎の持ち家である。

ぴしゃっ。

玄関の戸を閉める。

女はがつくり床に手をつけると大きく息を吐いた。

「はあゝ、助かったゝ。玄瑞、恩に着る。」

「いや。しかし一時はどうなるかと思ったなゝ、晋作。」

侍もへたつと玄関先に座り込む。

実はこの侍が長州藩士で晋作の親友の久坂玄瑞、女が当のお尋ね者の晋作であった。

その時玄関の物音を聞きつけてか奥からばたばたと人が走って

きた。

「高杉さ〜ん、大丈夫でしたか。良かったーっ。」

「弥二?! お前藩邸じゃなくて、こっちにいたんか? ぐえ
っつ。」

弥二郎は思いっきり晋作に抱きついた。

「良かった、無事でーっ。」

「俺がそんなへマすると思うか? …おいおい、泣くなって。」
弥二郎それに構わずわんわん泣いている。今回の件に相当責任を感じていたんだろ。晋作はやれやれと、ほっと息をつくと弥二郎の背中を優しくなでた。

そうしている間に奥から栄太郎がのっそり現れた。

「あ、高杉さん、お帰りなさい。どうでした?」

彼の冷静な物言いに晋作は呆れた。

「・・・栄太、お前もうちよつと・・・何かないのか? ほれ、いたわりの言葉とかよー。」

栄太郎が何か言おうとした時、不意に玄関先から声がした。

「栄太郎、そんなのこいつに要らんからな。図に乗るだけだ。」

「あつ、久坂さん、お帰りなさい。お疲れ様です。」

栄太郎はぴよこん、とお辞儀をした。

「すいませんねえ、来たところでこんなバタバタさせてしまつて。」

「全くだ……。京に來た早々借り出されるとはな。しっかし、お前ら何やってんだよ。一体? ……つてかなー。ふふっ。」

玄瑞は晋作をちらつと見ると、肩を震わせてくすくす笑い出した。

「・・・何だよ。」

晋作はちよつとムツとした。

「そ、そのかつこ・・・いやー思いのほか似合つとんなー。さすがに通りで倒れてるのを見た時はぎよつとしたけど。」

言われて晋作の顔がみるみる赤くなる。

「っつ、うるっさいっ! だから嫌だつたんだっつ!」

・・・くつそー、よりにもよって一番見られたくない奴に見られた拳句、不覚にも助けられてしまうとは。

玄瑞はまだ笑っている。相当ツボだったらしい。

「いやゝ。でも浪士組の奴に肩をたたかれた時の演技サイコーだったぜ。こう、ふらつと倒れてこられた時には僕の方がびっくりした。」

「へーっ、高杉さんでもそんなことするんですね。」

栄太郎が心底感心する。

それになんとなくカチンときた晋作。

「・・・弥二、離れる。着替えてくる！」

「僕、そのままでもいいですけど・・・。とっても素敵ですし。」

「あほかっつ！ お前まで何言ってやがる。もう二度とごめんだからな、こんなこと。」

晋作はすたすたと奥の部屋に行きかけて、ふと懐を探った。

「あ、ほれ、これだろ。松陰先生がくれたお守りってのは。」

ぽんっ

小袋を弥二郎の方に投げてよこす。

「そ、そうです！ これです。松陰先生がくれたお守りゝ。ありがとうございます！」

弥二郎はお守りをぎゅっと握り締めて言った。

心底幸せそうに満面の笑みで溢れている。

その様子を見ながら、栄太郎が弥二郎に言った。

「ねえねえ、弥二。そのお守り、何が入ってるの？」

「さあ、恐れ多くて開けたことないんで・・・。」

弥二郎は首を傾げている。

「この際開けて見せてよ。」

栄太郎は興味津津である。

「確かに中見てみたいよな。」

晋作も弥二郎の傍にやってきた。玄瑞も思慮深く言う。

「あの連中に開けられてなかったのは幸いだったが、一度は確かめてみる必要があるそうだな。」

皆に口々に言われて弥二郎は意を決した様だった。

「そうですね……。開けてみます。」

するするする……。

皆が息を呑む中、小袋の包みが開けられる。
出てきたのは一片の紙。

「紙……。ですね。」

弥二郎がその封印を解いて恐る恐る開ける。

その中を見て、皆の時が一瞬止まった。

「な、なんだよこれーっ。」

第一声は晋作だった。

「あつはつはつ。これはいいですねえ。」

栄太郎は大笑いしている。

「全く……。この師にしてこの弟子ありってどこかあ？」
玄瑞も笑いが止まらない。

それは宮部鼎蔵が描いた、松陰先生の女装姿の絵であった。

が、弥二郎だけは笑いもせず、まじまじとそれを見ていた。

そして、がばつ、と顔を上げた。

「僕も先生みたいに頑張って女装も上手くなりますっ!!」

「ならんでいいっ!!」

三人が同時に突っ込みを入れた。

遠くでほーほーとふくろづの鳴く音が聞こえた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6390f/>

幕末異聞 疾風録4～必殺?! お守り奪還作戦!

2010年10月10日00時59分発行